

日本ことわざ文化学会 第7回西日本分科会の開催報告

かすかに春の気配を漂わせる小雨の同志社大学今出川キャンパスは、いつにも増して落ち着いた佇まいを見せていました。

表題の分科会(参加者：16人)は、清水泰生理事の司会、渡辺慎介会長の挨拶によって幕が開き、お蔭様にて多くの成果を得て閉幕することができました。また、9人の参加者をもって開かれた懇親会ではことわざ談議に花が咲き、あっという間の2時間でした。

以下、研究発表と講演の大綱と若干のコメントを記し、報告に変えさせていただきます。ありがとうございました。

研究発表

1、「日本語教育におけるICTとことわざ・ことわざ類」

(西川久美会員、望月恭子会員、清水泰生会員)

ICTとは情報通信技術のことで、教育にどう活かせるかが今後のポイント。明年以降の具体的な実践報告を待ちたい。また、ことわざ研究と日本語教育の交流することの必要性が説かれた。学際研究の発展と充実に期待したい。

2、「新聞報道に見ることわざ」(古後靖弘会員)

①天声人語、②使用頻度、③注目ことわざ、の三つの区分による事例報告があった。今後はコラム毎の対比、社会面／オピニオンなどの紙面を対照することにより、紙面とことわざの特性といった知見の集積を望む声があり、新たな研究ジャンルへの展望が開けた思いがした。

講演

「水戸黄門の主題歌のように」

(奥村訓代 高知大学名誉教授、前日本比較文化学会会長)

大項目として15、小項目では32に分類された日本語文型を示し、それに当てはまることわざを抽出して解説がなされた。また、映像を流して表題の主題歌に見ることわざの文型の説明があった。文型に該当しないことわざはあるのか、については聞きそびれた。

これらの文型の一部は、庄司和晃氏の創作ことわざにおける「型はめ教育」の技術論として用いられている。今回示された日本語文型分類を的確に活用することにより、創作ことわざの現場研究は大きく前進する、と確信した。

文責：山口政信